マックス・E・アマンの

世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、
障害飛越のワールドカップを創設しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。
そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

text: Max E. Ammann, translation: Mariko Takahashi, design: DynamiteBrothersSyndicate

馬主の理非曲直——マドレーヌ・ウィンターの功績

最近、古参の国際馬術競技関係者が一堂に会し、いわゆる「古き良き時代」について語り合った。昔を懐かしむ一人がこう話す。障害飛越、馬場馬術、総合馬術と長く付き合う者がいる一方で、瞬く間に興味を失ってしまう者が必ずいる。後者にはニューリッチも多く、競技会のスポンサーになるにしろ、トップライダーに馬を購入してやるにしろ、馬術の世界に足を踏み入れることで、派手に見えるし社会的にも認められると思っている。だが、すぐに実現しないと、失望してさっさと離れていってしまう……。

そうこう話すうちに、懐古主義者の面々は、何より重要なのは馬主であるということで、意見の一致をみた。話題に上ったのは善き馬主だけではない。概して善事よりも悪事をするような馬主についても話に出た。影響力を過大評価し、たとえばオリンピックや世界大会、大陸大会のチーム選考過程などに、何かと関わろうとするような馬主である。挙がった中の一人が、ヘルベルト・シュナプカ博士。石油商で、所有する種馬場〝ネームテン〟は、'60〜'70年代にドイツでもっとも重要な障害飛越馬を抱えていた。

シュナプカ博士は2003年に他界したが、所有していたスポーツ馬は150頭に上った。ハルトビヒ・シュティーンケン、ゲルト・ビルトファング（ともに世界チャンピオン）、ポール・ショッケメーレ（ヨーロッパチャンピオンに3度輝く）、ヘルマン・シュリッド（ヨーロッパチャンピオン）は、皆ヘルベルト・シュナプカ所有の馬に乗っていた。当時一度、ヨーロッパ選手権のドイツチームが、シュナプカの馬に乗ったライダー3名、他の馬主の馬に騎乗したライダー1名で編成されたことがあった。シュナプカ博士は3名では満足しなかった。チームの4頭すべてシュナプカの馬にしたかったのだ。ドイツ馬術連盟は圧力にさらされた。ドイツのマスコミも巻き込まれ、脅かしと圧力と逆圧力を経てやっと、ことは収まった。選手権に出場したシュナプカのライダーは3名だけだった。

スポーツ界当局に働きかけようとしたり、馬の調教に口を出したりする馬主は珍しくない。'70年代、スイス人馬主のウィリアム・モーセットはウォルター・ギャバスラーを即刻解雇した。調教期間中、一番良い馬にもう一度水濠飛越させてくれという馬主の要求を、撥ねつけたためだ。この即時解雇は、ギャバスラーがモーセットの馬に乗り、スイス選手権に5度優勝し、世界およびヨーロッパ選手権に出場した後のことだ。

自分に全身全霊を傾けてほしい。馬術競技会で、そう馬主がライダーに求めたときに問題が起こる。朝食、ランチ、ディナーを共にしたがり、調教についてライダーに自分の意見を聞いてもらえると考えるのだ。

もちろん、〝善良な〟馬主もおり、おそらくそちらの方が悪徳な馬主より多いだろう。輝かしい例として、マドレーヌ・ウィンター＝シュルツ夫人が挙げられる。オリンピックチャンピオンのルドガー・ベアバウム（障害飛越）、イザベル・ベルト（馬場馬術）、インゲリット・クリムケ（総合馬術）を支援している。過去には、アメリカ人パトリック・バトラーとスイス人アーサー・シュミードが記憶に残る。

パトリック・バトラーは、'60〜'70年代、アメリカ馬術チーム障害飛越馬のもっとも重要な供給源だった。特にキャシー・クスナーは寛大なバトラーの恩恵に浴している。アーサー・シュミードは、'76年オリンピックのブルーノ・キャンドリアンなど、スイス人ライダー数人の障害飛越馬を所有していた。バトラーとシュミードは目立つ馬主だったが、分別があり寛大、かつ勇敢で——スポーツを心から愛し、思いやりがあり献身的だった。

これは72歳のマドレーヌ・ウィンター＝シュルツにも当てはまる。父親がフォルクスワーゲンとコカコーラのベルリンにおける販売権を握っていたため、その遺産で、称賛に値する支援ができるのだ。マドレーヌ・ウィンターは、姉妹のマリオン（長いことクリスチャン・アールマンの馬の馬主だった）と共に、ベルリンのグルネバルトで乗馬を始め、ドイツ女性ライダーチャンピオンに3度輝いている（'59年に馬場馬術、'69年と'75年に障害飛越）。

'78年、当時の世界チャンピオン、ハルトビヒ・シュティーンケンの牧場を手に入れた。シュティーンケンはその少し前に交通事故で亡くなっている。'87年、障害飛越ライダーのディートリッヒ・シュルツと結婚。ディートリッヒは'08年に他界した。

'97年、マドレーヌ・ウィンターはルドガー・ベアバウムに初めて馬を提供している。この'92年オリン

マドレーヌ・ウィンター（右）とヘンリク・フォン・エカーマン（左）。'13年ヘアニングでのヨーロッパ選手権にて。©Jenny Abrahamsson/World of Showjumping

フェルデンのWBYCH６歳馬決勝戦も支援するマドレーヌ・ウィンター（右）。©Ridehesten.com

ピックチャンピオンは、ミュンヘンでアレクサンダー・モクゼルと6年を共にした後、リーゼンベックで自身の牧場を開業した。3年後、マドレーヌ・ウィンターがイザベル・ベルトに2頭の馬場馬を購入。リーゼンベックでは、ルドガー・ベアバウムに加え、世界的ライダーがさらに3名、ウィンター所有の馬に乗っている。マルコ・クッチャー、フィリップ・バイスハウプト、スウェーデン人のヘンリク・フォン・エカーマンである。

マドレーヌ・ウィンターはまた総合馬術ライダーのイングリット・クリムケも支援している。イングリットは、マドレーヌ・ウィンター所有のアブラクサスに乗り、'08年と'12年、オリンピック団体競技で優勝した。さらに馬場馬術のカリン・レーバインとイナ・ザールバッハもウィンターの馬に騎乗。

マドレーヌ・ウィンターが所有する馬は全体でおよそ50頭。多くを若馬の頃に手に入れている。マドレーヌ・ウィンターにとって、ライダーは大きな家族の一員。信頼と友情に支えられ、共に歩んでいる。

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかたわら、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟（IAEJ）の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざま大会でディレクターを務めるなど多大な貢献をしてきた。